

# 芦安ファンクラブ通信

第15号  
秋号

NPO法人  
芦安ファンクラブ  
南アルプス市芦安  
芦倉1589-8  
事務局：(大滝)  
055-288-2531

## 南アルプス「北岳」を舞台に 市職員登山研修を実施

今年四月一日、峡西地方の旧六町村が合併した「南アルプス市」が誕生した。そこで市職員を対象に、本市の象徴でもあり我が国第二の高峰「北岳」に登山することを通じて自然に対する理解を深め、その素晴らしさを知り、登山及び山岳に対する認識を取得し、併せて職員相互の親睦と体力向上を目的に、芦安ファンクラブの宮下重晴さん、塩澤裕子さん、手塚秀美さんの三名を指導員にお願いし、九月五日(金)・六日(土)の一泊二日で登山研修を行なった。参加者十六名を対象に「南アルプス芦安山岳館」の全面的な協力を得て事前学習会を実施したが、参加者中、三〇〇〇m級の経験者は僅か三名であった。席上、「私でも大丈夫かしら」「どれくらい寒いかな」「早速、登山用具を買いに行かねば」等の声が聞かれ、身も心も準備体制に入った。登山の当日、天気は快晴だった。準備運動を済ませて七時間半強の行程先に在る「市営北岳山荘」を目指し出発する。三時間程で到着した大権沢二俣で大休止を取る。ここまではいいペースだ。冷夏のため、例年より多く残っている雪渓を渡ってくる風が額の汗をたちまち冷やしてくれる。二十分程で出発するが高度を増す毎に傾斜はきつくなり少しずつ隊列がばらけ始めてきた。右手方向の「北岳バートル」が段々近くに迫り、そこに源を発する沢のしぶきが頬に当たり心地よい。上部二俣を過ぎた所で

## 南アルプス市職員山岳部「北岳ゆめクラブ」設立

よいよ、本日一番の難所である梯子群への挑戦である。約一時間後、八本歯コルに到着すると大歓声が沸き起こった。そこには早川町と本市が頂上で境を接する「間の岳」が目の前に雄大な姿を現し、その左には雲の上に富士山が実に美しい姿を見せている。しばらくの休憩後、四十八段の梯子を緊張しながらも力を振り絞って登り切ると、白とピンクの「タカネビランジ」が岩の間から清楚な姿で我々一行を迎えてくれた。

朝食を済ませ、全員で「北岳」をバ

午後三時三十分、今夜の宿泊地「北岳山荘」に到着した。やがて夕日に染まる「北岳」の雄姿に全員が感動を受け、夕食では今日の労をお互いにねぎらい、明日のがんばりを全員で誓い、好天に恵まれることを期待して八時消灯になった。

それぞれ記念写真を撮り「モーニングゴーストタイム」を楽しんだ。山頂からの三六〇度の大パノラマを見せたかった念に後ろ髪を引かれる思いで下山。再び強風の中、「北岳肩の小屋」を目指す。二七〇〇m程の小太郎尾根では、鳳凰三山が雲の間より顔をみ



霧の中の北岳山頂 でも満足げな顔々

ツクに記念撮影を済ませ、七時三十分出発。仙丈ヶ岳を左に見ながら山頂に向かう。稜線は信州側よりの風が強くて時折息も出来ないくらい突風が吹くがここでは風のよけ場がない。吊尾根分岐まで行き、尾根より下がって休憩を取るが稜線上は瞬間風速三十五メートルはあろうか、立つていられないほどの強風である。隊の一部から山頂はあきらめて下山してはの声が出た。無理はない。「あと二十分なのに」「つらい思いをしてくれたのに」。選択に迫られる。しばらく協議の結果危険回避のあらゆることを想定して登頂を決断、再び山頂に向かった。九時二十八分真っ白い霧の中に聳え立つ「北岳」山頂に立った。幸い山頂付近は風が弱く穏やかだった。全員を握手で迎えたがその顔は満足感・幸福感・達成感で満ち溢れていた。

た。森林限界、さらには草すべりを經由して、御池小屋にて昼食を兼ねての休憩を取り、森林帯の尾根道を一路広河原へと下る。全員無事に下山したのは四時六分であった。予定より遅れたの言うまでもない。

市営温泉ロッジにて、山の疲れを温泉で流し、小池助役の二日間の締め言葉の頂き、次回の山行を誓いながら家路へとついた。

一日間の研修登山を通じて、初期の目的は十二分に達成出来たと思っている。

参加者の大多数が、市内にこれだけの素晴らしい山岳や自然があることを初めて知り、まさに市の名前のおり「南アルプス」を体験した。このことにより本市にとつてかけがえのない財産であり、全国に誇れる自然資産であることを認識した。この素晴らしい自然を守り、後世に伝えることは我々に課せられた責務であるとの思いを持ったはずである。又、職員として今後自信を持って、南アルプスのガイドが出来るきっかけづくりにもなった。願わくば、山頂で素晴らしい眺望を体験してもらいたかったが、しかし、参加者は山頂までの強風を体験し、口々に「景色も見たかったけれど、山の厳しさを実感しました。それで充分です」。

この山行がきっかけとなり、自然を学び、親しみ、豊かな恵みに感謝するとともに、登山に必要な技術を習得し、体力の向上と職員相互の親睦を図り、環境保全に理解を深めることを目的にした愛好会が結成された。小池会長を軸に動き出したこのクラブの名前は「北岳ゆめクラブ」。

十月には、全職員に呼びかけ「栗沢山」「アサヨ峰」、十一月には、「夜叉神峠」「高谷山」への山行を実施したい。今後この会の充実により「南アルプス」が文字通り地域の共有するすばらしい自然財産として認識され適正な保護と活用に寄与される事を期待したい。

芦安支所長 青木 記

## 第九回南アルプス芦安 登山教室鳳凰山で開催

第9回秋の「南アルプス芦安登山教室」が鳳凰山で行われた。一泊二日を高山で過ごすという初めての形で行われた登山教室は台風接近という悪条件ではあったが、参加者、スタッフ共々和やかなうちに無事に終了した。迷走台風の進路は前日の夜まで定まらず、スタッフをハラハラさせたが、再接近時までには参加者等が十分帰宅出来るという確信のもとに開催を決定した。当日キャンセルも少数名あったが、これは各自の判断であるから仕方ない事だ。

手際よく受付事務を済ませ、準備されたオヤツと資料、それに記念品の高山植物のポケットブックをザックに詰め込み、シヨボシヨボとしてきた雨空を

恨めしく見上げながら出発した。途中で合流する前日泊隊はすでに準備万端で意気揚揚と待っていて、半年ぶりの再開風景もそこそこに夜叉神登山口へ到着した。雨はまだそれほど強くなく、準備体操や簡単なセレモニーの邪魔になるほどではなかった。雨具着装やコーモリ姿で夜叉神峠を目指して歩き始めた。最初の急登が終わり道がなだらかになると、すぐに共通した話が各班のあちこちから聞こえ始めた。それは昨年九月に行われた全国ボランティアフェスティバルのイベントで取付けた樹名板の話だった。それぞれに自分の取付けた物を見つけては懐かしがってくれた。何十年かに一度竹の花が咲き、そして枯れる話も出たが、そのサイクルを確実に見た人はいないようだった。夜叉神峠までは出発してから一時間を少し回った頃着いた。すでにヤナギランは落花し、ウメバチソウとマツムシソウがかるうじて雨の中で

出迎えてくれた。もちろんこの天気では西にそびえる白根三山は望めない。

峠から刈安まで下り、その後すぐに堀切までの急登となる。この急な尾根で人口林から原生林へと景色が変わる。堀切は文字通り小尾根を掘り切って、木材を運ぶ道を通り易くした所で、今では信じられないような昔の生活感が伺われる。

木の根でしつかり守られた尾根道をしばらく登り杖立峠に着く。ここから西へはあのウエストンも歩いたという五葉尾根ルートがあったが今は廃道になっている。由来を説明すると誰かが「フアングラブで手を入れてくれれば是非歩いてみたい」と宿題を投げかけた。検討課題か。

樹林帯を下り登りすると四〇年程前に大規模な山火事で焼け開けた所へ着く。通常火事場跡と呼んでいる。晴れていれば北岳が池山尾根越しに見えるところだがこの辺にはオトギリソウがかすかに名残を見せ、シロバナヘビイチゴが真っ赤な実を着け、リンドウが開き損ねていた。一株のイワシヤジンを見つけたが、これも鳳凰シヤジンになるのかな。

この辺のガラガラした登りは歩きにくく皆しんどい感じで登っている。雨の中ではどうしても下向き歩行になり、無口になり易い。臨機応変に班の流れを変えたりして対応する。花岡会長の気転がさえる。さすがに今回参加者中最高齢者の方はペースが合わず、本体には先行して南御室小屋に向かってもらい、後に付く。

雨は幸運にもこの辺りによく出るきのこを恵んでくれた。ハナイグチやショウゲンジが夕食のきのこ汁になるくらい収穫出来た。小屋の迷惑を考えずにお願いで済ませよう。悪い癖だ。小屋に着きそれぞれポジションをセットし落ち着いたところで学習会を始めた。晴れていけば屋外で車座になってなごやかに……なんて思っていたが、小屋の中央部を借しても

らう。少し暗く小さな字の資料は見にくかったかも知れないが贅沢を言うつもりもない。幸い他のパーティーは数人程でこの団体を珍しそうに見ながら協力してくれた。この山の歴史や山名の由来など、準備した資料をもとに解説する程度に終わってしまったが、山小屋ではせいぜい一時間位だろう。しっかりと学習会を望むのであればあと半日欲しいことになる。気の会ったグループでの憩いの後の夕食には、味噌汁の中であのきのこ達が泳いでいた。ぬるっとしたのがハナイグチ、菌ごたえのあるほうがショウゲンジ、他のものは見当たらないようなので採ってくれたスタッフに感謝しつつもほっとする。夜中に星空が見え、うっすら朝焼けになる夢を見て目を覚ます。しかし現実には屋根のトタンにつとさるような大雨だった。台風に刺激された前線が今この上にいる事は明白である。今日も雨がやむ事はない。



次回への誓いも込めて小屋前で記念撮影

どうしても稜線までいきたい人がいれば

対応も不可能では無い。スタッフは実に充実している。その旨を参加者に伝えると「スタッフの判断に任せ全員で行動したい」とのありがたい意見だった。雨の朝、南御室小屋を後に引き返す。

「これから先の山頂や稜線はまたの機会に送るけれど、必ずまた登りにきます。」皆口々に自分に言い聞かせるように山小屋の管理人に別れを告げる。

道々にはまだショウゲンジが残っていた。いや夕べの雨で起こされたのかも知れない。原生林の中、道沿いの苔は雨でしつとりとしてみずみずしい。数色のみどりは無垢の色合いを感じさせる。その中にコフタバランやイチヨウランの葉を見つけ後ろに伝言してもらおう。小屋から登り終わった葺平は山道の交差点になっていて辻状である。東にとれば大ナジカ峠を経て春の登山教室で汗を流してもらった千頭星山に至る。その研修会で講師の山寺仁太郎さんが言っていたオオナンジ、コナンジの兄弟の伝説を誰かが始めた。「山を知り山に教わる山歩き」。

「山を知り山に教わる山歩き」。意義深い事である。足が揃い、いいペースで下っていると、後ろの方でカモシカに出会えたといって喜んでる。このカモシカはサービスがいいんですよ。雨で景色が見えなかった人達には特に。よく姿を見せる場所だった。実際に出会う確立は非常に高くイチロウの打率に近い。行程変更にもかかわらず、下でのすばやい対応のおかげで速やかに風呂、食事、修了式に移り、いつもながらありがたい感想などを聞くと無事に終わってほんとに良かったと胸をなでおろす。

今回は第十回の記念山行になる。「是が非でも参加しなければ」唯一一人九回連続参加している座元さんは力強く言い残した。継続は力であり宝だと思おう。

芦安フアングラブ 清水 記



テーマ別の集いで事例発表する富沢さん

十月十一、十二日の二日間、昨年の山梨大会へのお返しの意味で全国ボランティアアフェスティバル石川大会河北ブロックへ参加してきました。5町村の共同開催でしたが、交流パーティーが内灘町、テーマ別の集い、交流広場は津幡町で行われました。芦安ファンクラブからは2名でしたが、なんと南アルプス市からは総勢九十数名の参加者でした。私達が参加した河北ブロックへの他の地域からの参加者は十九名だったので、事実上南アルプス市と石川県の交流の場所と言っても過言ではない状態でした。その中で昨年芦安部会へ参加してくれた九人中五人に再会する事が出来ました。皆さんがそれぞれ中心的な立場で活躍されていました。合った瞬間に一年前の話に花が咲き、夜叉神峠へ登った感激などで盛り上がり再開を喜び会いました。

全国ボランティアアフェスティバル石川大会へファンクラブ員参加・友好をつなぐ



大いに盛り上がった交流パーティー

テーマ別の集いではその中の一人富沢さん（芦安ファンクラブ会員）が定年後のボランティアに付いて事例発表を行い、中高年男性のボランティア活動にヒントを投げかけました。交流広場では伝統芸能の披露などがあり石川県の文化の深さを実感しました。最後はなぜか炭鉱節をみんなで踊り大会は大成功だったと思います。石川県の皆さんの暖かい人情に触れ「砂と風の町」で日本の海のさわやかな風を感じる事も出来ました。そして最初から最後までイベントに密着し参加者一人々に挨拶やお礼を述べて歩いていた町長さんの姿が印象的でした。来年は滋賀県大会だそうですがこのボランティアの流れが無理の無い形で続いて欲しいと思います。

清水 記

南アルプス 芦安山岳館 便り

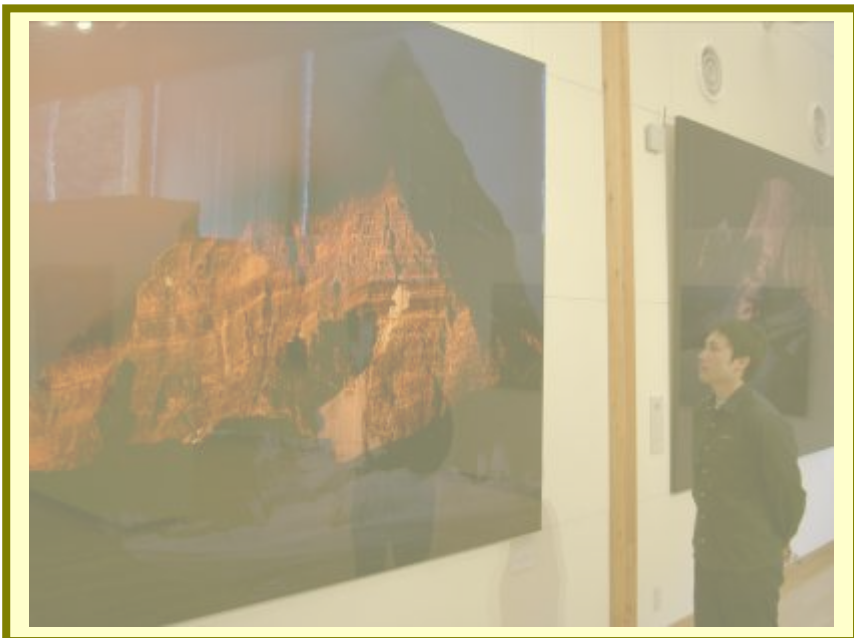
世界の山々の中で現在、南アルプスとカナディアン・ローキーズの25点を迫力ある大画面で展示し、引き続き北アルプス、富士山、尾瀬、ヨーロッパ

「キング・アルバート」世界記念財団より山岳写真の芸術的表現、山岳文化の貢献よってアルバート一世功労勲章を受けました。今当館の企画展の作品群は本年夏、山梨県立美術館で開催され高い評価を受けた同名の展覧会に出品されたものです。

白簾史朗は、1933年大月市に生まれ幼い頃より自然に親しみ、富士山の写真で著名な岡田紅陽氏に師事、1958年からフリーの写真として、日本はもちろん世界の山々を精力的に翔け回り、山岳写真のジャンルを確立し、2000年には世界の写真家としては初めて、スイスの「キング・アルバート」世界記念財団より山岳写真の芸術的表現、山岳文化の貢献よってアルバート一世功労勲章を受けました。

南アルプス芦安山岳館では第2回企画展として、山岳写真界第一人者の白簾史朗氏のご好意により山岳写真展を開催しています。

白簾史朗「世界の名峰を讃う」展 開催



ルプス、ヒマラヤ、カラコラムの山々を連続的に、来年4月まで展示する予定です。世界の山々を身近に感ずるよい機会ですので、大勢の皆様のご来館をお待ちしています。

南アルプス芦安山岳館 塩沢 記